分類番号	A16	取組名称	宮津市域の伝統的祭礼・芸能・文化に関する調査研究とその成果公開

研究代表者所属・職名： 生命環境科学研究科・准教授　　氏名： 松田 法子

研究担当者：

京都府立大学（松田法子・青地伯水）

外部分担者・協力者（河森一浩、山口孝幸、管啓次郎、林立騎、古木洋平、松田美緒）

主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名）

京都府宮津市、宮津商工会議所

【研究活動の要約】

平成 28・29 年度に引き続き、ベルンハルト・ケラーマンが明治末期に宮津を訪れて残した著作を導きに、かつて存在した宮津の「茶屋町」新浜の過去と現在、宮津及び丹後の祭礼・芸能について調査と映像による記録を行った。

祭礼・芸能について今年度は特に元伊勢籠神社の葵祭・太刀振りと、浦嶋神社の太刀振り、また船を用いる伊根の祭礼に着目し、記録した。併せて、籠神社禰宜の海部氏及び浦嶋神社宮司の宮嶋氏にインタビューを実施した。新浜については、茶屋のご子息に行ったインタビューを映像に編集した。現地調査やインタビューの内容は、約 30 分のドキュメンタリー映像作品『さっさよやっさを探して –宮津と神話編-』としてまとめた。

なおケラーマンは著作の中で、浦島舞など明治末期の新浜で行われていた芸能の記録に加え、前掲した籠神社の葵祭と思われる祭礼や、天橋立に関わる神話などにも触れている。これらの芸能等の検討について舞踏家の今貂子氏に参加を要請し、映像中で身体表現を行った。

以上の取り組みは別項に述べるように府民向け等のセミナーや講演会で折に触れて公開をはかったほか、2019 年 2 月 10 日には「みやづ歴史の館」で現地シンポジウムを開催し、宮津市長を始め市民ら約 100 名が聴講した。

【研究活動の成果】

本調査研究の成果はまず、約 30 分のドキュメンタリー映像作品『さっさよやっさを探して –宮津と神話編-』に集約された。今後、この映像を宮津市内あるいは歴彩館など文教施設での上映・展示に活用していくことが期待される。また平成 30 年度の取り組みのなかでは、昨年度製作・公開した『さっさよやっさを探して –海と祭編-』が、宮津山王社御輿組が開催するフォーラムや刊行物に活用されるなどの地域連携上の成果も生まれた。

2019 年 2 月 10 日に実施したシンポジウム「1908、古代、いま —ケラーマンと宮津の時空間」は、開催前に毎日新聞に事前記事が掲載されたほか、当日の様子は毎日新聞と産経新聞の2紙に掲載された。

平成 30 年度で 3 回目を迎えた当 ACTR による一連のシンポジウムと調査研究、映像製作の取り組みは、以上のように、地域での認知及び波及的・連携的な活用も広がり始めている。令和元年度のシンポジウムの開催時期についても既に市民からの問い合わせが寄せられており、また他の地域団体との連携についても相談を受けているなど、令和元年度以降の取り組みにも期待が寄せられていることを特記しておく。

【研究成果の還元】

- 「1908、古代、いま」，2018年度ACTRシンポジウム，みやづ歴史の館，2019.2（参加者約100名）
- 「宮津新浜、茶屋町の記憶」，京都外科医会講演，ホテル，2018.12（参加者約60名）
- 「ケラーマンの著作にみる100年前の祭、まち、人々」，宮津山王祭御輿組フォーラム「宮津祭と宮津城下」，みやづ歴史の館，2018.12（参加者約250名）
- 「地域の微かな歴史に耳を澄ます」，京都府立大学ACTRポケットセミナー，国際京都学・歴彩館，2018.10
- 「『さっさよやっさ』を探して －近代と戦後、宮津の茶屋町」，京都学ラウンジミニ講座，国際京都学・歴彩館，2018.9

・映像作品『さっさよやっさを探して –宮津と神話編-』（約 30 分）※一般公開方法を検討中

【お問い合わせ先】生命環境学部（研究科）松田研究室　准教授　松田 法子
Tel: 075-703-5390　　E-mail: kirpinfo@kpu.ac.jp(京都地域未来創造センター)

参考（イメージ図、活動写真等）

1908 年、古代、いま
—— ケラーマンと宮津の時空間

今留子
舞踏家
今留子舞踏研究所

河森一浩
考古学
宮津市教育委員会

古木洋平
映像
COGI FILM

田中まり
ドイツ文学
富山大学 非常勤講師

徳田誠一郎
第 13 代当主
清輝楼

松田法子
都市史
京都府立大学 准教授

京都府立大学 ACTR
「宮津市域の伝統的祭礼・芸能・文化に関する調査研究とその成果公開」
（研究代表：松田法子）2018 年度シンポジウム

2019 年 2 月 10 日〔日〕
13:00-15:30（12:30 開場）
みやづ歴史の館 文化ホール

1908（明治 41）年のこと。ペルンハルト・ケラーマンという 29 歳のドイツ人作家と、カール・ヴァルザーという 31 歳のスイス人画家が来日しました。さまざまな土地を訪れたうえで、ケラーマンはこう言います。

——ぼくは日本に滞在中、最もすばらしい時をここで過ごした——。

宮津に日を過ごしながら、ケラーマンは土地の人たちとの交流を重ねました。滞在先だった荒木屋の人々、足繁く通った茶屋「山中」の踊り子たち、漁師、職人、古物商、役人、巡礼、まちの子供、旅回り役者の一行、海軍将校の青年ら。そして、祭にたずさわる大勢の人々と。

このシンポジウムではケラーマンの体験を軸に、宮津の奥深くに息づいてきた物語に迫ります。

前半では、1 世紀前の日本における外国人の「観光」、また聖地や霊場としての天橋立の古層に注目します。

後半に上映する映像では、籠神社と浦島神社に伝わる物語と、葵祭・太刀振り、伊根祭・本庄祭を追いかけながら、茶屋「山中」の座敷でケラーマンが触れた当時の芸能の、神話や伝承にも連なるそのさまを舞踏を介して呼び起こし、かつまたそうした芸能の舞台であった茶屋や新浜の里としての歴史をも、当時を知る女性たちの貴重な証言からたぐり寄せます。

ケラーマンは宮津でさまざまなものを見、そのある部分を克明に書き残しました。

このシンポジウムでは、ケラーマンの 111 年前の体験を経糸に、神話や伝承に綴められてきたこの記憶、この土地と海との切り離しがたい関係、芸能や女性が紡ぐ綾なたる身体的歴史を、時の水流からすくいとって横糸に織りなしながら、宮津の凝打ち際に響まれてきた時空の立体化をはかります。

共催：宮津商工会議所・宮津市教育委員会

開催挨拶・主旨説明　松田法子
講演 1　田中まり
「百年前のディープジャパン ー作家ケラーマンが惹かれた宮津」
講演 2　河森一浩
「考古学からみる聖地、霊場　ー古代・中世の『天橋立』」
映像上映「さっさよやっさを探して ー宮津と神話編ー」
「2018 年の映像制作とケラーマンの宮津をめぐって」
話題提供：今留子＋徳田誠一郎
登壇：田中まり＋河森一浩＋古木洋平＋松田法子
閉会挨拶　今井一雄（宮津商工会議所会頭）

※車でお越しの方は「パーキングはまぢち」にご駐車下さい（5 時間まで無料）

111年前 独人が見た宮津
府立大研究者ら 10日・シンポと上映会

明治時代の宮津を旅したドイツ人作家、ペルンハルト・ケラーマンが見た世界を探る研究を府立大の研究チームが続けている。3年目の今年の主な舞台は府中地区。ケラーマンは元伊勢籠神社で4月に営む葵祭の太刀振りや天橋立の神話を克明に記録していた。研究代表の松田法子准教授らは10日にみやづ歴史の館で111年前に思いを巡らすシンポジウムと上映会を企画している。【安部拓輝】

1908（明治41）年すばらしい時をここでに訪日したケラーマンは当時29歳。宮津の漁師や職人、芸者らと交流を重ね、帰国後に発表した著作「日本散策記」で「ぼくは日本に滞在中、最もすばらしい時をここでつづっている。

ケラーマンは葵祭の太刀振りを「全国的に有名な剣舞」と紹介。舞い手は鋭い刀を巧みに操りながら足を踏み、片手を頭上に掲げて太陽にあいさつする。と描写していた。

松田准教授は「砂地を払って天を仰ぐ太刀振りの所作が鋭く捉えられている」と語る。

シンポは午後1時から。ドイツ文学が専門の富山大非常勤講師、田中まりさんが「百年前のディープジャパン」と題して講演し、市教委の河森一浩学芸員が「考古学からみる聖地、天の橋立」と題して語る。上映する映像では地元に残る伝承や神話、新浜の芸能などにも触れながら現在の祭りの風景と翻訳文章をシンクロさせている。宮津商工会議所と市教委の共催。無料。当日参加も可能。

111年前に宮津を旅したドイツ人作家、ペルンハルト・ケラーマン＝府立大提供

葵祭で太刀を振る中野地区の青年。太陽に手をかざした＝宮津市大垣で2017年4月24日

シンポジウム「宮津—海、音色、声、記憶」(2019.2.10 開催)のポスター(左)及び新聞報道記事

※シンポジウムの記事は 2019 年 2 月 6 日毎日新聞(右)のほか、同 11 日毎日新聞、同 13 日産経新聞に掲載(いずれも丹波・丹後地域面)。